<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>プラトン主義とマゾヒズム ラ・ファイエット夫人『モンパンシェ公爵夫人』における「シャバンヌ」造型の意味</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>萩原 茂久</td>
</tr>
<tr>
<td>シャンオン</td>
<td>一橋論叢 70(2) 113-128</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1973-08-01</td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>テキストバージョン</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/2004">http://doi.org/10.15057/2004</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
プラトン主義とマゾヒズム

プラトン主義とマゾヒズム

プラトン主義とマゾヒズム

アンリ四世のパリ入京（一五九四）からマゾランの死

（一六六一）に至るバロック期の幕が降りて、まさに古典主義時代が始まろうというそのほどと最初の年にこそ古典主義時代が度を減すことを、感じられていた以上にその意味が象徴的であり、もっと強くこの作品の小説史的重みが強調されなければならぬ。

一般に叙事詩的なバロック期のRoman Histoireが、無駄を除き導き出された技術的用語や現実の様式や、一種の理想主義は消え去って、小説は必然的にテロの速報

プラトン主義とマゾヒズム

ラ・ファイエット夫人は、『クレーヴの奥方』の十六年をオギュスト・クールベ書店から匿名で出版したが、この作品は分量において前者の五分の一にすぎず、はるかにテロの早い、簡潔な文体によって粗雑的に描写され、それがすべてにあたるものであるにもかかわらず、『クレーヴの奥方』の原作がすべてここにあり、明らかに同種の作品ないし前駆者の作品であると、おおおおおのラ・ファイエット夫人研究者たちが認知している。

（15）
ロード王女の結婚式のパートのささいであり、デカルト王女の結婚式のパートのささいであることがこの瞬間の心配するための要素である。なお、アウェンとアシェットは、この結婚式のパーティーのための部分を含んでいる。

さて、一九○二年ごろのラ・ファイエット夫人が研究の開花期に、多くの卓越した解釈と解釈によって期待の研究者たちを導いたパ・ローットの変圧が、モンパンシェ公爵夫人にあつた。"レ・ヴァの愛方"の要素としてつぎの四つの事項を指摘した。その第一は「歴史的結婚」で、第二は「十六世紀の宮廷生活」で、第三は「政略的結婚」である。第四は「婚姻」である。

さて、それでも、作品の基底を形づくる三角関係が、それぞれ作品の思想に真にかかわっているかは、むだに結婚される必要がある。なぜなら、作品が完成の度合いを一つも結婚させる必要があるからである。それから、彼が長期間不在であっただけでも、シャルトル女は他の人からそのうわさをきいて、その姿をひと目見たいと好奇心は燃やしていたであろう。クロード夫人とスヌール公との出会いは、『ローレル公爵』と

「どこか」（いままで出たことがない）の感念論を援用した当時流行の恋愛理論の不可欠な初期他と、観世なりと特徴する文体と、事件・行動の内在性、
一橋論載 第七十巻 第二号（18）

モパンシェ夫人についてのアシュトンの解説は彼女にとって不実を働くことになっている。彼女はよくて夫を裏切ろうとしないのである。ただ彼女は弱かったのであり、結果として不幸の実を働くことになっている。彼女はこの作品においてクライマックスを示す密の場面において、弱さのゆえに事態の進行をとめることがなかったのである。

このように見えても、モパンシェ公爵夫人における三角関係は作品構造的にはなお弱いものである。彼女はアシュトンの存在に関してからみ合い、いったそうあるべき単一性の効果を弱める結果となっている。それにしても、この作品には他にかかわる特徴的な要素が存在するだろうか。

第II章
複合的・総合的構造としてのシャンス伯

私はつぎ的理由から、主人公ではないとして、少なくとも最大に興味を抱かせる登場人物として書かれる理由がある。
（19）プラトン主義とマクロヒズム

を抱いたように、モンパンシェ夫人は同じ家に滞在する
シャルヌスに対して尊敬と信頼を寄せていたが、しかし
結婚後すぐシャルピエに妻を残し、対エゴノの努力
で一時的に愛情の相互通販していたにもかかわらず、
シャルヌスは一種精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占けていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占けていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はないとしても、シャル
ヌスは一見精神的な位置を占めていたという。当
の代わりに、愛情の相互の流出はな
的ではあるが、深い愛情が流露する関係のうえにある
シャンヌは、悲劇的にものぼろうとされていたのだ
と、いないだろうか。

最後に、シャンヌが「クレーンの奥方」におけるス
ムールであるということは、オーバールはクレーン夫人
と相互の愛情に結ばれているとはいえ、彼の愛は悲劇
的なドラマの相手に出ることがなかったことによって
いう、愛する愛をしていたが、死にゆくほどの男の心情を、悲痛な調子でうたい
上げる詩性が封じ込められているといったらよいだろう
か。

以上、「シャンヌ公爵夫人」におけるシャンヌ
伯爵の造形が実は複合的であり、総合的な性格をもつっ
と、この作品が類のない独創性をもつことは演出だけ
でなく、結論をいそくえにしようしばらく考察を進めても

Ⅲ
「シャンヌ公爵」の「カギ」（モデル）ない
必要があるよう。

し源

シャンヌ伯爵がモンパンシェ夫人に熱烈な愛を抱き、
彼女にそれを相手に告白し、それが受け入れられなかっ
たのちに、彼女とギ・イズ公爵とのあいだの手紙の運び
を、連絡状の説明の場面を成
立させる彼の行為については、「クレーンの奥方」の内
部をどれほど探してみても同種の発想は見いだされない。
もし作者の含蓄な想像力がこの発想をえたとしたらならば、

この登場人物、さらにはこの作品の独創性はいまま
しにその価値と重みを増やすであろう。

しかし一般創作の秘密として、作者の体験や体験が
なんらかの形で、少なくとも巧みに合成され変形されて
作品に現わらないということはままだといってよい。ま
してフランスの十七世紀において、歴史の事件や同時
代の話題を風聞や見聞の作品への利用が広く日常的にお
こなわれ、創作作文学的価値の問題はいつどよう、倫
（21） プラトン主義とマゾヒズム

理的にはなんら非難はされなかった。当時の用語で「カ
ギ小説」というものが存在し、読者の側からモデルを当
てたのしむという流れがあり、ラ・ファイエット夫人自
身も若いころ、驚異的先例行為を示したスキューレル
女が、ギリシャ神話の当世であり、ラ・ファイエット夫人
の「シルビウス大王」の第六巻目から、モデルを読むと
遊びに熱中していた。大いに熱中していたことは記録によ
って知られている。

宮廷であるらぶ歴史に名を刻んだ人物が描かれる場合
で、「カギ小説」の形はないとしても、少なくともその発
想をそこにお置いたであろうことは推定できる。「カ
ギ小説」の一例もっていたといえよう。

こういった時代的な営々の歴史を受けての作者による作品
が、彼女がよりかつての時代の至の意識的な努力による
「カギ小説」の形はないとしても、少なくともその発
想をそこにお置いたであろうことは推定できる。「カ
ギ小説」の一例もっていたといえよう。

一方、宮廷の記録をもとに「コンパニオン・マニオに」は「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ
オン・マニオに」をもとに「コンパニオン・マニオに」をもとに「コンパニ

破壊する。」、シェイズ伯爵はギリシア伯爵に似ている。

初遇の半分には彼をあしらっていたシェイズ、ついに一目をしのぶ逢行きをさせるに至る。小説のシェイズ伯爵は大胆にも夜な夜のシェイズ夫人のへやにはおり、

「王女アナリェット」で最大に築かれるひとり

初遇の半分に彼をあしらっていたシェイズ、ついに一目をしのぶ逢行きをさせるに至る。小説のシェイズ伯爵は大胆にも夜な夜のシェイズ夫人のへやにはおり、

初遇の半分には彼をあしらっていたシェイズ、ついに一目をしのぶ逢行きをさせるに至る。小説のシェイズ伯爵は大胆にも夜な夜のシェイズ夫人のへやにはおり、
王弟妃に対する「異常なまでの親心」からであろうが、これがシャンヌのモンパンシェ公爵夫人に対する異常なまで親切な行動の一般的な行動に似かよっている行動は認められる。シャンヌの手紙の届け手ということでは説明されておらず、又彼を女主人とつけにいらっしゃるシャンヌのことを考えると、シャンヌが実際に行ってはならない。シャンヌの手紙の届け手ということでは説明されておらず、又彼を女主人とつけにいらっしゃるシャンヌのことを考えると、シャンヌが実際に行ってはならない。
「シャンペン伯爵」のドラマ主義

シャルル九世を中心とする旧教徒側と、モンパンジェに対するのは、歴史的枠組みとして、多くの作品に含まれる。このドラマの話を進めるため、歴史的に宮廷記録から、この作品の背景となる小説『シャンペンの公爵夫人』が書かれた時の印象を踏まえ、形式的には本編の物語を示す。すなわち、歴史の枠組みに据えられるが、すでに述べているようにシャンペン伯爵の恋愛関係は、宮廷内での問題である。

シャンペン伯爵と王家との関係は、ヴァンデラル時代の初期のうちに、新たな役割を果たす。このドラマは、モンパンジェの流れを追うものであり、彼の生涯を描くものである。
彼は彼女を骗取ったが、彼女が気づき、腐れ果てる様子を観察した。彼女が男を騙すことを許し、彼女はその行動を楽しむ。彼女は彼の目を逃してしまった。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用していた。彼女は彼を信用ていた
したがってシャンペンヌと合流する。

これにつづく最後の部分において、シャンペンヌの心理探は自己愛を中心にする一種神的な視点との相乗作
用によってきわめて高調した段階を迎える。モンペンシ
ュ夫人はギュイズへの愛のための自己を利用しているに
すぎないと言われたときのシャンペンヌのrebbeことき苦悩
はかり知れないが、さらに手紙の運び役を顧問
たとき、それは彼にとって恋の段落を始める。プラト
ン主義はその苦悩を打撃されかかえんど力を与えている。

モンペンシュ夫人が自分のギュイズに対する気持ちを
打ち明けるとき、他者の愛と取り戻した公正無私な
一種の絶対的立ち場に一瞬昇るシャンペンヌは彼女に
いかにわかりかいかに感動し、そのような高い価
値の心を所有したという願いを抱かずにいられない。

シャンペンヌは手紙の運び役という絶望的な仕
事を受けまるよりほかの道はないのである。

さきほど述べたように、「完全な愛」にまとうめりつ
ぎとする对象への愛は、彼女を反省と自分に対する
感謝を望まないでなどなかった。そしてまた忍耐を限界に
愛するひとにふさわしく告げたこともないだけではなかった。

プラトン主義は従順な信徒に返してしまった。

夜の晩がおこなわれる場面に接していよいよ激烈な
のとなり、シャンパンヌの内面での現実的なものと永遠のもの
の相合がおこなわれるというより一層の課題が

124
（27） プラトン主義とマゾヒズム

「自分の利益のためにこんなことを（彼女の危険のことを）」という気持ちを制するように、自分から積極的にギューズを手引きする行動への第一歩を踏み出した。シャンプレンシェ夫人は刻々変化する事態においてあらためて力を持ち、彼女自身の心に残る自己愛があることを証明し、彼女は自分が彼女を守ることを時にあきらめようとした。そして彼女は、いかに美しい自身を愛するか、それを知るにあたって、彼女は自分がそれまでの自己愛を愛すことに気付いた。

シャンプレンシェ夫人は、ギューズに反対する人間の前に、自身の心に残る自己愛があることを証明し、彼女は自分が彼女を守ることを時にあきらめようとした。そして彼女は、いかに美しい自身を愛するか、それを知るにあたって、彼女は自分がそれまでの自己愛を愛すことに気付いた。
モパンシエ夫人は誠心のあいだ、シャパンヌへ行こうと決心した。シャパンヌはこの世で最大の悲しみを抱いていた。モパンシエのへやに通じる通路に追い詰められた。

不幸にもそのあいだ、モパンシエは、橋を渡る足音に目覚め、不審に思い、夫人のへやを見に行こうとした。

夫人はギュイズといるこの参謀心からなさるシャパンヌに怒りを抱えている。シェパンヌは一拳づつで追い詰めていったが、狂気と怒りの中にとらえられて思い切って殺さない声を出していたので、この通路に向かっていたモパンシエに気づかなかった。妻のへやにだれか男がいると思った彼はモパンシエを打ちあけて破ろうとした。

ビートレ主義のマゾヒズムへの屈折

ドアを破ろうとしているモパンシエの叫び声は、三人をふるえあがらせた。この瞬間のシャパンヌの心理は、作者はどのように分析しているか。

シャパンヌ伯爵は、公爵の声をきき、妻のへやにだれもない耐えられないと公爵に思いこませるの是不可能だと見てとれていない。

もし彼がギュイズ公爵を発見したなら、モパンシエ夫人に向かう。シェパンヌの自己犠牲への決心はビートレ主義の大勝利なのだろうか。それではなければ、モパンシエ夫人に向かう。シェパンヌの自己犠牲への決心はビートレ主義の大勝利なのだろうか。

この作品のこの選択が、書かれている以上のものを読者に読みとさせる力をもっていることを私は強調しなければならない。「愛する物の高貴さ」、かく「前例のない偉さ」と、高貴さの断片が存在する。そしてそれは読むと高く深い動機と動きが存在する。
プラトン主義とマゾヒズム